

進化論的認識論における主体性の問題

森 本 司

一九七〇年代に、いわゆる認識論を議論する新しい分野が生物学のなかに登場し、他の学問にまでその影響が及んだ。生物学では、コンラート・ローレンツを筆頭に、ルーベルト・リードルやゲルハルト・フォルマーなど、心理学ではドナルド・キャンベル、哲学では、カール・ポパー他多数の研究者がこの認識論に関わっている。この生物学を中心とした認識論は、進化論的認識論と称し、これまでの認識論の欠点を補い、あるいはそれにとって代わるという意識で議論を展開している。

その進化論的認識論によると、この認識論の対象となるのは、人間の理性機能にまで及ぶ生物の認識問題であり、その認識問題をダーウィンの進化論に基づいて位置づけるものである。これに関して、リードルは次のようにその行為を自負している。

「すでに伝統的な認識論は、人間の認識獲得の過程は大成功だったとする考察に間違いはない、と思っていた。いまは、我々はこの件でまだ判断をしようとは思わない。だが、我々が生物学者と

して立証できること、それは、三十億年以上も前から生物は、みずからの認識獲得で世界をうまく写し取ってきた、ということである。」^①

「認識論のみではできないことを、生物学が可能にする。生物学は、観察者に対して、探求されている対象の外に立場を提供する。」^②

このようにリードルは、哲学の分野でこれまで展開されてきた認識論で解決できない問題を、進化論的認識論が、解決すると主張する。進化論的認識論者たちの多くは、このような強い自覚を持って自らの進化論的認識論の重要性を主張している。これに対して、当然のことであるが、このような主張は哲学の側からの批判を呼ぶことになり、^③そして、この両者の対立は、そのまま平行線をたどっている。

進化論的認識論の議論が次第に表面化してきてはいるが、その議論も（他の領域、他の理論と同様）直接哲学という分野のなかに入り消化・吸収されているわけではない。いや、むしろ一部の研究者

を除くとまだ十分に相互交流がはかられているとは言えないよう
だ。それどころか、進化論的認識論と聞くだけで、これを敵対視す
る場合も考えられる。また、進化論的認識論の側の態度も微妙で、
妙に哲学の話題を取りあげながら、哲学の議論を脇に置いたり、末
席に入れたり、あるいは、起爆剤のように利用したりしている。

哲学の側(特に「意識」や「主体性」の問題に関心の高い哲学関
係者)からすると、人間の精神現象をかなり単純化し、それが脳生
理の付随現象であるかのような印象を与えている一部の進化論的認
識論研究者の表現(進化論的認識論の代表であるコンラート・ロー
レンツは、この素朴さを解決しようとしている。それが成功してい
るかどうかは別であるが。)には違和感を覚える人もいるだろう。
また逆に、「主体性」の側の哲学者のかたくな態度にも微妙に(論
理的であろうと努めるがゆえに)時として人工的な議論の展開が現
実離れを感じさせてしまうことがある。進化論的認識論の側の素朴
さがむしろ正しいのではないかと感じる場合もありうるのである。
この両者の議論に対しては、不可思議な印象が生じる。両者の議
論のどちらに対しても同意するところと違和感を覚えるところが存
在するのである。このような同意と違和感はどこから生じるのであ
ろうか。

そこで、この小論では、両者の認識論で対立している構図をより
明確にし、そこに隠れている問題点を指摘することを主眼とする。
進化論的認識論と哲学との対立のなかで、問題となる数々の議論の
うち、(一)進化論的認識論と哲学との関わり、(二)「外界の認識」
をめぐる議論の概略、そして(三)「主体性」に対する考え方の違

いを示し、哲学との対立やそこで生じる問題の解決の道が、進化論
的認識論の側に存在するのかわかを考察・検討する。

この両者のすれちがいがかどうかを考察・検討する上で、問題
をあまり複雑にしないために、ここでは哲学者の側の議論は「主体
性」問題をその中心におき、進化論的認識論と哲学との議論のすれ
ちがいに對し進化論的認識論側から何が考えられるのかを最後に指
摘したい。

一 進化論的認識論における「哲学」の位置づけ

進化論的認識論は、ダーウィンの進化論に基づき、生物学の枠内
で生じた認識論であるが、これに対して、哲学内で行なわれてきた
これまでの認識論を、ここでは哲学的認識論と呼ぶことにする。

進化論的認識論は、哲学的認識論と一線を画しつつも、これと対
決しようとしているのか、またはこれを取り込もうとしているのか、
あるいは、無視しようとしているのか、その態度が微妙であいま
いである。

進化論的認識論の代表者の一人である、ルーベルト・リードルは、
『認識の生物学』のはじめで生物学の側から議論された認識論が成
立することを指摘している。その際は、「本書の立場は、(中略)
哲学的認識論とは根本的に一線を画している。」と述べて、進化
論的認識論が哲学の議論や問題から解放されていることを表明して
いる。

さらに、認識する個人と認識の対象との関係をめぐって起こる論
争についても、哲学で議論するべきか生物学で行なうことが可能か

と論争しても仕方がない、と彼は考えている。このような議論の道筋のなかで、リードルも時として主張があいまいとなる。哲学的認識論と生物学の認識論とは二線を画するといいながら、哲学的認識論は、生物学的認識論の手助けを必要としていてと考えているのである^⑦。

また、フォルマーは、『進化論的認識論』という著作の序論で、

哲学は問題の源泉であつて、その解答は哲学ではなく（哲学には原理的に解決不可能であるから）、他の諸科学が行なうであらうと宣言している。そしてその意味でのみ哲学は生き残るというのである。哲学が立てた問題を科学が解答する、というわけである。フォルマーは進化論的認識論が学際的であるとして、哲学もまたその一部に組み込まれるか吸収されるだろうと考えている。そこでは哲学は問題集（悪くすると誤答例の代表としての問題集）になるに過ぎない。

この点では、リードルも同じで、彼もまた問題の源泉としての「哲学」は認めているが、それ自身のなかに問題解決の芽がないので外からの解決しかない、と考えている^⑧。

しかし、それほどまでに哲学は袋小路のなかで混乱し苦しんでいるように見えるのだろうか。また哲学的思索の例として、現象学を挙げるるとすると、この現象学を無視して認識論を語ることができるのだろうか。

むしろ、生物学は自らの分野の多様性を活かして、哲学を位置づける必要があるのではないか。ローレンツが行なった動物行動学や記述についての学問性の議論で、生物学内の還元主義的発想を中和させたとすれば、生物学内の多様な分野構成こそ哲学と生物学の

関係の議論にとりよきモデルとなりうるのではないか。それは、認識問題を取り扱う領域は、それがどのような分野で行なわれようと、学際的であるばかりではなく、相互に還元不可能な領域となりうることを示している。この点については最後にもう一度触れよう。

二「外界」の認識をめぐる対立

進化論的認識論と哲学的認識論の両者は、「外界の認識」をめぐる議論で、激しく衝突する。進化論的認識論の「外界の認識」に関する基本的な主張は次のように示される。(一) 認識主体の認識器官はすべて、進化の過程を経て形成されてきた、(二) このような認識器官は、外界との適応を経てきているので、部分的にであるにせよ、認識主体の認識器官は、外界（現実・「物自体」）と対応している。ローレンツは次のように述べる。

「すなわち、こうした要求をする時には、生物学者には自明に見えるが、精神科学的な傾向で考える人にはすべてけつして受け入れられないある認識論的な見解があるのである。それは、人間の認識はすべて相互作用という過程に基づいている、という仮定として表わせる。つまり、まったく現実的で活動的な生きたシステムとして、また認識する主体として人間は、主体と同様に現実的で、認識の対象となる外界の事実と相互に作用し合うという仮定に基づいている。」^⑨

進化論的認識論における外界にあるものと認識内容との一致とい

う考え方は、表面上I・カントを中心とする哲学的認識論における主張とは正面から対立しているように思われる。¹²⁾確かに、部分的にせよ外界における環境と我々の認識器官とが対応していなければ、生物は生き残ることができないという生物学側の主張と、認識内容は認識主観の側の複合的な構成産物であり、我々の認識内容が外界と対応しているということは主張できない(むしろ知りえない)という哲学の側の主張は、相入れないように考えられる。

だが、ここに両者の主張の微妙なすれちがいを感ずることができ、進化論的認識論の側の主張は、つまり外界にあるものを生物の認識器官は捉えている(対応している)という生物学者たちの想定している主張は、我々の暗黙の(従って前言語的で生物的な)活動の部分に注目し(我々は毎日黙って様々な活動・行動をとっている)、そしてこの点を問題としている。彼らが「外界を認識する」と表現する場合には、もちろん様々な外界を考慮しているはずであるが、その模範型としているのは、生存に必要な生物の認識対象である。そして、これは人間の場合も同じであって、まさにさきに挙げた生物的レベルでの人間の行動の対象であろう。つまり、哲学者といえども生きていかなければならないのだから、そのような無自覚的で言語を介さない(特に生物的な)生活が、外界の対象の認識を保証している、と言うわけである。一方、哲学者の主張は我々の自覚的意識(自らのものばかりではなく、他者や、他文化圏の物による媒介も含めて)を徹底的に言語化して得られた結果である。これは一見抽象的で、現実離れしているように見えるが、もつとも身近な、それ以外にはない拠り所から議論が出發している。両者の

主張には、議論の対立の影でかみ合わない歯車のような部分がどこかに存在していると考えられる。この点について、もう少し検討しよう。

進化論的認識論の側の主張は、我々の認識器官が外界を「客観的に」把握しているというものである。生物の認識器官は長い進化の過程を経て形成されてきたものであり、これまで生き残っているということが外界に対して不完全ながらもその一部を正しく写し取っている証拠であるというわけである。確かに、哲学者が行なういろいろな批判は注目に値するが、言語的哲学的考察をする以前の毎日の生活のなかで、我々は無自覚的に行動しており、その行動が可能なのも、人間という生物が外界がある程度正しく認識しているからに他ならない。

これに対して、哲学者からは、次のような反論が可能である。生物学者が想定している「外界」というのは、日常生活を抽象し、様々な意味や価値の連関を切断して物象化した構築物である。毎日一連の流れのなかで現われている現実を主体が分断し、孤立させて物化しているのである。従って、この場合認識されている外界の「物」は、主観によって抽象的に構築された概念に他ならない。つまり、ここで言えることは、進化論的認識論者たちが「外界」とそれをめぐる意識ということで想定している内容は、哲学者たちの議論のなかで、もうこれまでに論じ尽くされている(そして、おそらく否定されている)であろうということである。哲学の側の主張は、進化論的認識論者たちの主張する「現実」をもすでに取り込んでしまっている。

さらに、これに対して、哲学者たちの日常にも様々な前言語的生物的活動があり、それらは外界と対応し外界を認識している証拠である、と主張する進化論的認識論者も、哲学者の活動を自らの主張のなかに取り込むようとしている。彼らによると、思考も生物の生存にとり必要な機能（進化の過程で発展してきた機能）として意味づけられている。しかも、科学的な知の増大とその変革によって、こうした進化論的認識論の側の主張にも何かしらの真実性が（日常的な知のレベルでは）感じられる。このような状況を考えてみると、両者の主張は、正面から対立するのではなく、互いに相手の主張を自らの主張の一部として取り込むという形で位置づけられており、ここから議論のすれちがいが生じていると考えることができる。

ところで、進化論的認識論たちは、人間の思考という働きも生存や適応という機能の上に成立していると言っているのであるが、この「機能の上に」という表現はいったい何を意味しているのだろうか。このような進化論的認識論の主張においては、思考主体（の人間性）はどのように考えられているのだろうか。

三 「主体性」問題をめぐる対立

進化論的認識論では、これまでもすでに何度も見てきたように、人間としての精神現象は、一応生物的な機能とは分離されているものの、それ以外の機能の追及によって自動的に解明される現象として捉えられている。これに対しては、様々な立場から、異論が提示されるであろうが、そのなかでも特に、人間の日常的な現実から、つまりその社会生活における活動や意識から「人間性」という固有

な現象を考察する立場（これをここでは「主体性」の哲学の立場と呼ぶことにする）からは、このような進化論的認識論の「現実」は、とうてい認められないであろう。この立場の視点では、「人間という生物の外側からの立場や視点」というものは、原則として虚構となる。

すべての哲学者の立場を単純に「主体性」の哲学の立場とするわけにはいかないが、ここでは、進化論的認識論を批判する哲学者のなかから、特に「主体性」の哲学の立場を代表するR・シュペーマンの批判を取り上げる。

シュペーマンの批判は、進化論的認識論よりむしろその土台となる進化論に向けられている。彼の主張によると、因果論的立場に固執する反目的論的思考は、人間の生きている現実を分断し、ばらばらにした結果を實在とすりかえている。たとえ進化論的認識論が、テレオノミー（種維持的合目的性）という概念を持ち出し、目的論的な思考法を別の形にしたところで、それは分断された目的論であって、不徹底な思索となる。「主体性」というものは、数学的なもの・物理的なもの・化学的なもの・生物学的なものに還元しようとしても、不可能であって、目的論的な解釈・説明のみが近づきうるのである。こうした反論によって、目的論的思索と「主体性」の哲学の回復を、彼は目指している。

シュペーマンの言うように、すべての活動には人間の主体的活動（これが現実为目的論的連関を形成する）が加わっており、その次元から学問的成果の、またその活動の意味や価値・重要性が感じとられ、考えられるからである。人間の合目的的行為なくしてすべて

の学問的な所産はありえないだろう。

進化論的認識論は、目的論的に活動をする（世界を把握し価値づけ意味づける）人間を、単純化・相対化し、他の生物と同じ次元に置き、その時々で理解され説明される進化論に取り込み位置づける。しかし、「位置づける」という行為をしようとする限り、その行為からくる目的論的な価値づけという制約がその理論内容に影響を与える。理論は主体の関心と価値体系のなかで位置づけられる、とシュペーマンは批判する。

四 問題の構図

これまでの経緯を別の角度から考察し、進化論的認識論と哲学的認識論の間にある対立の構図を、認識内容（認識行為の結果得られたもの）を中心にしてもう一度見直してみよう。これにより、進化論的認識論と「主体性」の哲学との間にどのような関連が見られるかを指摘する。

認識器官は、どの生物であつても、長い進化の過程から形成されてきたものであつて、人間の意識的な認識能力も、その系統発生史的な展開の延長において初めて理解可能なものとなる、という進化論的認識論の主張を「下位からの制約」と呼ぶ。この時、この制約が強いかわ弱いかは、重大な問題だが、これまでの議論からも分かるように、進化論的認識論の立場をとる人たちの代表には、この制約を大きく考える傾向がある。そこから、人間の精神現象を生理現象の単なる付随的性質とみなすのである。

進化論的認識論は、還元主義を排除しつつも、人間の「主体性」

問題に関しては、これを付随現象とするかあるいは無視、よくても保留という態度をとっている。ところが、この人間の精神現象あるいは「主体性」問題を科学的あるいは生物学的次元の問題へと変化させることは、実は還元主義ではないのだろうか。誇張せずに議論するとしたら、この問題は、ここでは、次のような問いとして提示することができる。すなわち、「我々の認識器官は、我々の認識内容を制約するののか」という問いである。「認識器官」の機能とその結果得られた「認識内容」は、いったいどの分野、どの領域、どの次元に存在するのであろうか。

これとは逆に、シュペーマンによる進化論的認識論批判は、その主張をさらに押し進めると、逆の方角からの制約という性質を帯びることになる（その意味内容は、下位からの制約とはかなり異なるが）。シュペーマンらによる批判は、人間の「主体性」および人間の活動そのものの本質から、人間の認識内容（この場合は、「理論」など）は目的論的な傾向を内在しており、これを排除した人間認識は本質的に欺瞞的である、と主張している。このような人間活動・行動の本質的傾向から、認識内容を位置づける仕方を少し強引であるが、「上位からの制約」と呼ぶことにする。

この「上位からの制約」に関しては、哲学内部からの批判も考えられる。実は、この人間認識の本質的傾向と、その結果生み出されてきた認識内容との関係は、「作者と作品」との関係にも比較することができる。解釈学で行なわれてきた「作者と作品」との関係についての分析では、「作者」と「作品」は、まったく切り放されているわけではないが、認識内容（「作品」）のなかに研究者（「作者」）

の「意図」や「目的」の存在を素朴に議論することはできない。もちろん、そこに目的論的の連関を見とすることはできるが、直接的で強力な結び付きがあるかどうかは疑問である。

以上のように考えていくと、制約の質はまったく異なるが、「下位からの制約」についても「上位からの制約」についてもその制約自体は存在する（例えば、認識器官が存在するということ、また人間は目的論的に行動するということ）が、その制約の程度に関しては依然として不明のままであるということが分かる。心身論の長い歴史や、以下に考察するローレンツの主張を待つまでもなく我々の意識は、何ものにも還元されえない。我々は、波長そのもの（それをどのように議論すべきかは脇に置くとして）を見るわけではないし、また逆に、花にアレルギーのある人は、造花の花にも反応することがある。また、我々の活動の結果は、それがどれほど作者の意図にそったものでも、いったん作者の手を離れると、独立し様々な脈絡のなかに融合していく。確かに、この運動自体は、目的論的な構造をもっているかもしれないが、その産出物は、作者や理解者の制約の連関を何度も打ち壊していく。

このような状況のなかで指摘すべき重大な点は、認識器官およびその機能が認識結果をどう制限しているのかという関係についての考察（自覚）が、進化論的認識論には欠けている、ということである。我々には見えない波長があり聞こえない周波数があることは確かである。だが、それにもかかわらず、様々な絵画が生まれ、多様な音楽活動が営まれている。この点の考察を抜きにして「下位からの制約」の路線に無自覚的に乗ることはできないであろう。

五 コンラート・ローレンツの立場

議論自体を単純化するため、進化論的認識論側の主張をこれまで単一的に考察してきたが、実は、進化論的認識論においても、人間に固有の精神現象や社会活動は、単純に生物学的な知識のみで割り切れると考えられているわけではない。しかし、表明のわりに発言のあちらこちらに人間精神の問題もいざれ進化論的認識論の進歩に繋がって解消されると考えているところが見られる¹⁶⁾。

ただ、進化論的認識論を主張した人のなかで、コンラート・ローレンツは、そもそも始まりからこの問題を明確に位置づけていた。彼の主張も時として生物学よりになることはあるが、基本的には人間精神の世界の固有性を他の説明原理へと還元することを拒否してきたのである。そこで、彼の主張をもとに、この「主体性」の問題をもう一度進化論的認識論の側から考察し、それに連動した形で「外界」概念の変容と進化論的認識論に対する新たな「哲学」の位置づけの可能性を検討してみよう。

ローレンツは、進化論的認識論の議論を提示したそのはじめから、人間の精神現象の問題に深い関心を抱いていた。その際、当然予測される生物学的還元主義に対する批判に対し、彼自身は、その主要な著作において次のように述べている。

「いつも何度も強調されなければならないことだが、私たちは自然科学者として、奇蹟を、すなわち遍在する自然法則の突破を信じていないにも関わらず、しかし以下のことに関しては私たちは

まったくはつきりと分かっている。それは、より上位の存在者の成立を、その下位の先祖から余すところなく説明することは、不可能である、ということである。特にミヒヤエル・ポラニーが強調していたように、より上位の生物は、そのより単純な先祖へ還元不可能であり、さらに生きたシステムは無機物にそしてそこで生ずる過程に還元されえない。¹⁸⁾

「二つの互いに独立したシステムが連結されると、一欄外に記述されているベルンハルト・ハッセンシュタインの著書から取り出された単純な電気モデルがこのことをはつきりと示しているように、それとともに不意にまったく新しいシステム特性が、それまで存在しなかった、さらに暗示されもしなかった新しいシステム特性が、成立する。まさにこれが、神秘的に響くがまったく正しい、ゲシュタルト心理学者たちの『全体はその部分以上である』というあの命題の深い真理内容なのである。¹⁹⁾」

そして、この新しいシステム特性が生ずることを「雷光」(Fulgur)と呼んでいる。²⁰⁾そして、この新たなシステムは、下位のサブシステムによつては説明し尽くすことはできず、ローレンツ自身、この考え方を人間の精神現象にまで適用している。従つて、彼は人間の精神と生理的現象との間にある乗り越えられない間隙について次のように断言するのである。

「これに対して、ニコライ・ハルトマンが述べているように、『ただ我々にとって』、すなわち我々の装備している認識装置に

とつて、おそらく心身の裂け目は橋渡しできない。私は思うのだが、この裂け目はただ我々の知識の今日の状況にとつてのみ橋渡しできないというだけではない。我々の知識が理想的に増大したとしても、我々は心身問題の解決に近づくことはないだろう。体験の自律性は、化学的物理的法則からは、そして神経生理的組織のたとえ複雑な構造からさえも、原則として説明されえない。²¹⁾

また、ローレンツは、新しいシステムの登場を取り上げただけではなく、進化論的認識論の役割を示唆する記述も行なっている。ローレンツによると、無生物と生物を分ける分断線と動物と人間を分ける分断線は生物学が近づきうる、あるいは解消しうる分断線であるのに対して、生理的な過程と主観的体験の過程を分ける亀裂は、生物学では説明されないだろう、というのである。²²⁾この立場を押し進めれば、確かに、生物学が人間の世界について発言することはできるかもしれないが、生物学が担当する認識論が、哲学的認識論にとつて変わることは決していない。つまり、ローレンツが指摘しているように、一方の認識論の自律性を他方の認識論の自律性で解消しようとしても無駄なことだろう。このような考え方に立てば、あの「認識内容」は「雷光」によつて新しい上位システムになったと見なすことができる。従つて、進化論的認識論が下位システムの「認識器官」の機能をいくら説明したとしても、この新しい成果を説明し尽くすことはできないであろう。我々は、望むと望まざるとに関わらず、我々の日常的な経験の世界を、そして我々の体験レベルにおけ

る「認識論」を、たとえそれがどれほど不確実なものであろうとも、科学的知が解明する下位システムとしての「外界」と同列に論じることはできない。ましてや、我々の「現実」をその「外界」へと解消することはなおさら難しい。この先、この複雑に階層を構成する我々の認識世界を、どのように位置づけるにしても、進化論的認識論は、新たなシステムの座を確保しておかなければならない。

他方、生物学内部の分野構成を考えてみると、このような役割分担は、生物学内部においても、すでに実行されている、と考えられるのである。生物学は、実に多種多様な分野を含んでいる。一方では数学を中心とした分野があるかと思うと、他方では物理学や化学を中心とした分野があり、古生物学や脳生理学、動物行動学、分類学、進化論や生物学史など記述や観察を中心とする分野もある。実には一つの学問分野とは考えられないほどの多様性が生物学のなかにはある。

この事態をどのように見るかは、また議論を呼ぶであらうが、その一つの見方として、次のように考えることができる。すなわち、生物学は「現実」を見る様々な階層的視点に対応して構成されており、それらの各分野を一つの分野に全面的に解消することは不可能である（いくつかに統合されたり、消失したりすることはあるかもしれないが）。動物行動学は、他の生物学の分野と緊密に連携を保ちつつも、分子生物学にすべて解消されるわけではない。

これと同じことが、「哲学」の位置づけに対しても言えるだろう。K・ローレンツの「雷光」という考え方を、進化論的認識論が認めるとすると、下位の部分的システムの統合でできた新システムは、

下位のシステムからは予測できない新しいシステム特性を備えていることになるのだから、進化論的認識論は認識論を単一化することに努力するのではなくて、どの階層のシステムについて研究された認識論であるのか、ということにもっとこだわるべきである。このように考えていくと、進化論的認識論が、哲学的認識論と同じ層の上で議論しようとすること自体、そこに内部矛盾を引き起こしている姿を示してしまうのではないだろうか。

注

- (1) Rupert Riedl, *Biologie der Erkenntnis*, Berlin und Hamburg: Paul Parey 1979¹ 1981³, S. 23.
- (2) a.a.O., S.175.
- (3) 山脇直司、「進化論的認識論の普遍性を巡るドイツ語圏での論争」、科学基礎論研究、第七十号 一九八八年、を参照。
- (4) Vgl. Gerhard Vollmer, *Evolutionäre Erkenntnistheorie*, Stuttgart: S. Hirzel 1975¹ 1994⁶, S. 31.
- (5) G・フォルマー著『認識の進化論』（思索社）巻末の大江重吉氏による解説および Bernhard Irrgang, *Lehrbuch der Evolutionäre Erkenntnistheorie*, München: Ernst Reinhardt Verlag 1993, S. 136-S. 144 を参照。
- (6) Rupert Riedl, a.a.O., S.7.
- (7) Vgl. R. Riedl, a.a.O., S.175.
- (8) Vgl. G. Vollmer, a.a.O., S.212.
- (9) Vgl. R. Riedl, a.a.O., S.175.

- (10) ローレンツは、生物学における「記述」の重要性について論じている。R・I・エウンス、『ローレンツの思想』、日高敏隆訳、思泉社、一九七九年、一八七頁～二二〇頁を参照。
- (11) Konrad Lorenz, Die Rückseite des Spiegels, München : Deutscher Taschenbuch Verlag GmbH & Co. KG 1977¹ 1982⁶, S.11.
- (12) 事実問題・権利問題、およびI・カント哲学の解釈の是非は「ここでは問わない」とする。
- (13) フォルマーによると、「客観的」というのは、「現実との関係をより増大させる概念である。それは絶対的な基準としてあるのではなく、実在に接近する諸科学との関係によって修正される概念である。」
- Vgl. G.Vollmer, aa.O., S.31.
- (14) Vgl. G.Vollmer, aa.O., S.56.
- (15) フォルマーもリードルも素材にその視点を導入している。
Vgl. G.Vollmer, aa.O., S.155.
Vgl. R.Riedl, aa.O., S.24.
- (16) ローベルト・シュレーマン／ラインハルト・レーヴ、『進化論の基盤を問う』、東海大学出版会、を参照。
- (17) フォルマーは、“Evolutionäre Erkenntnistheorie”のなかで次のように述べている。
「すなわち、生物学と心理学との間にあるより大きな透き間が四十年前から動物行動研究(エングロー)によって埋められ、そしてこの行動研究は、自然科学と精神科学の分離を廃棄し、いや不可能にやめしているのである。」(S.111)
- (18) Konrad Lorenz, aa.O., S.54.
- (19) aa.O., S.49.
- (20) aa.O., S.47.
- (21) aa.O., S.215f.
- (22) Vgl. aa.O., S.215.
(もりもと・つかさ 豊田短期大学日本文化学科助教授)